Liberal Land

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下館, 和巳 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24963

下館和巳（教養学部言語文化学科、勤続約37年）

自由な大陸

リベラルアーツ

私は、1974年３月に、東北学院高校（かつては榴ヶ岡に対して本校と呼ばれていました）を卒業して、東京の三鷹市にある国際基督教大学（ICU）に入学しました。人文学科、社会科学科、自然科学科、語学科、教育学科の五つの学科がありましたが、学部はひとつしかありませんでした。教養学部です。

教養学部とは一体何か？それを理解するためには、大学４年間をかけて経験するしかありませんでした。私が教えを受けた先生方の印象深い言葉を思い出してみましょう。

「あらゆることに？をつけて、考えなさい。本に書いてあることにも、教授が言うことにさえも」（神学者　古屋安雄）

「質問は？と言われたら、たとえ質問がなくても真っ先に手を挙げて、なんでもよいから質問しなさい。手を挙げる、それは世のため人のため。君の質問がなあんだこんな質問でいいのか、と思われれば、後に続く人は手を挙げやすくなりますからね」（聖書（旧約）学者　並木浩一）

「教養の源は、必ずしも大学や本ではない。田園に、台所にあったりする」「話し手の力は、聞き手の脳を開けるかどうかなんです」（経済史学者　大塚久雄）

「コンピューターにはできないことをやりなさい。知識ではなく、想像力なんです、最も大切なのは」（数学者　絹川正吉）

「To love her is liberal education」好きなものを見つけなさい。そうしたら時間を忘れて夢中になれます。一生その好きなものと遊び続けること（英文学者　斎藤和明）

不思議な縁で、仙台に戻ることになったのは、東北学院大学が新しい学部、教養学部を創ることになったからです。1985年ですから、教養学部発足の３年前です。私に国際基督教大学の存在を教えてくださって、そこに学ぶことを強く勧めてくださった大木騏一郎先生ですが、その大木先生の恩師であられる橋浦兵一先生は、北村透谷研究の大家でいらして、私が仙台に帰るや否や、大木先生に橋浦先生のところに連れられていき、お会いした時に、こう話されました。

「教養教育は、入門ではなく、基礎です。入口ではなく、根本ですからね、そのことを忘れずに学生に向かいなさい」

橋浦先生は、教養教育が軽視されて専門教育に、教授の関心が傾きがちであることを憂いておられました。この言葉は、教養学部に夢を託した学生たちの教育にどれだけ大きな影響を与えたかわかりません。

システムではなく人

教養学部がいよいよ始まろうとした時に、私の大学の恩師斎藤和明先生が講演にいらっしゃいました。その時力説されたのは、大切なのは、カリキュラムでも組織でもなく、ひとりひとりの教師愛である。ということでした。そして、英文学からスティールのことば、

「彼女（ここでは憧れの貴婦人を意味する）を愛することが、リベラルアーツである。」

憧れる対象を見つけること、そして、自分自身の力で、憧れる高みに近づこうとすることが、

学びの真髄なのだというお話は心に沁みました。

私は、泉キャンパスが誕生するまでは、土樋キャンバスに研究室を持っていましたが、新しいキャンバスを見た時に、「空間や建築物は魂を育てる」という言葉を思い出しました。そして、土樋が英国ならば、泉はアメリカだと思いました。工学部のある多賀城はオーストラリア、泉ヶ岳の裾野が見える教養学部は、キリキラして見えました。そして新しいキャンバスで働く職員の方々も、イキイキしているように見えました。歴史と伝統のある大学の中枢である土樋キャンバスを英国というのは言い得て妙かもしれませんが、そこから飛び出した紳士淑女の創った泉キャンパスをアメリカに喩えるのも悪くないかもしれないと思うのは、自由という言葉を、私は、いつも、教養学部の学生たちと感じできたらからです。

教養学部の真骨頂総合研究

ゼミを、私は、東北学院大学の英文学科で担当していました。学生数は30名。ひとりの教員が、３年生時から２年間教え、論文を選んだ学生には論文を書く指導をします。

教養学部の学生は、全員論文を書かなければいけませんでした。学生数は約12名。少数精鋭。３年時は、演習、いわゆるゼミですが、４年時は、総合研究と呼ばれる卒論制作グループに属し、英文学科との大きな違いは、学生の人数だけではなく、指導し評価する教授が最低３人以上はいたことにあります。まったく贅沢な教育です。私は教養学部の真骨頂は、この総合研究にあったと思います。

私は、英文学科のゼミではできなかった、創ることをしたい、と思いました。2002年に、ロンドンのグローブ座で演出家として仕事をするまでは、友人の映画監督を招いて映画製作をしていました。ひとりでは創れません。「コラボレーションとクリエイティビティ」が、このゼミのコンセプトでした。

まず、映画製作の基本を学ぶ。監督、脚本、カメラ、美術、衣装、メイク、俳優と、言った役割分担をする。合宿、ロケ。集まる、思っていること考えていることを自由にことばにする。語り合う。私たちは、どんなに多くの時間を後の話し合いに費やしてきたかわかりません。時にぶつかることも、喧嘩になることもありました。

2003年に帰国してからは、映画ゼミの幕は下ろされて、代わってシェイクスピアの舞台を創るゼミが誕生します。

『リア王』が第一作でしたが、学生はたった４人でした。「俳優修行」という名前のゼミですから、基本的には、ズブの素人の学生を舞台に乗って演技できる力を養う時間です。稽古やワークショップは泉キャンパスの至る所で行われました。３号館と図書館の間の空間、体育館コミュニティセンターホール、礼拝堂、音楽室、生協前の駐車場のそばの芝生、３号館２階のエレベーターの前、図書館の地下、階段、学生たちの演技は場所を変える度に微妙に変化していきました。学生たちは膨大な時間を費やしてセ

リフを覚え、作品の研究に没頭し、素晴らしい舞台を創り、学科長特別賞を授与されました。翌年は、17名の学生が『ハムレット』に挑みました。『マクベス』『夏の夜の夢』『ベニスの商人』『テンペスト』『十二夜』『ジュリアスシーザー』。学生たちのチャレンジ精神はいつの間にか「俳優修行」の伝統になりました。口頭試問の日が公演日でしたが、自分たちの公演をなつかしんで、歴代のゼミ生が、子供たちの演技を見に、親御さんも駆けつけてくれました。

学生たちと過ごした時間こそが、私の教養学部での財産です。教養学部は姿を消します。しかし、あのキャンバスで学生たちのよろこびがつかんだ真理は、永遠に彼らのこころに残るはずです。そして、連綿と彼らの子供たちに受け継がれていくことでしょう。